

高松スタイル

4号

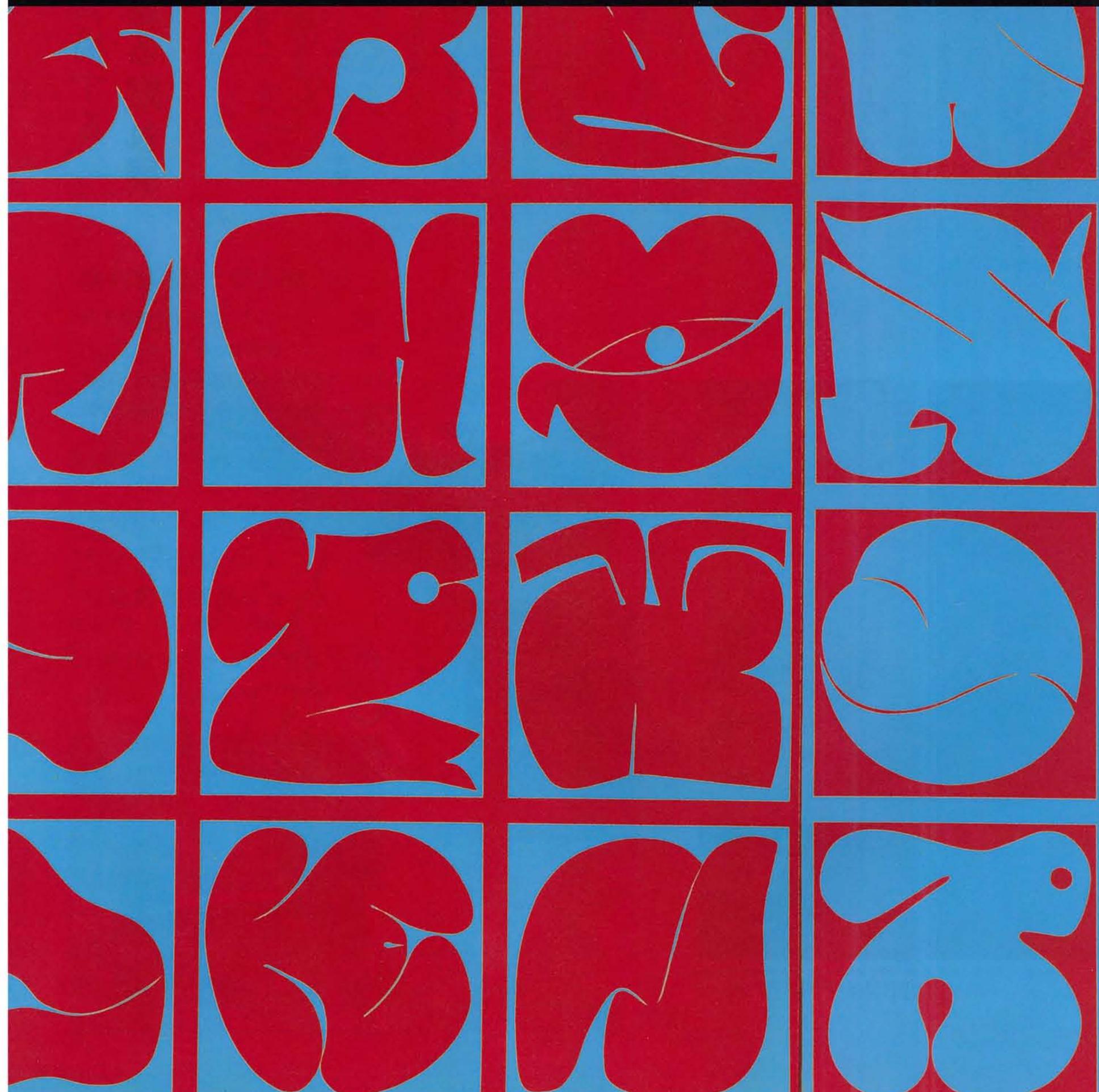
Vol.04 September 2009

# Anki

[あんき]  
Takamatsu Style Anki

## 特集 / 都心暮らしが面白い

- ・セカンドライフは百貨店すぐそば
- ・個性派住人が変える老朽ビル
- ・長老が奨める「街中暮らし」



# 森鷗外の小説に登場する 情緒ある離れ屋

冬の休暇に、四國へ心理學の講演を頼まれて出掛けた

文學博士小野翼君は、高松市で講演を済まして、

一月十日に琴平まで来て、象頭山の入り口にある琴平華壇に這入った。

(中略) 琴平華壇には、一月頃に客は一人も無い。

博士は中二階になつてゐる、十五畳敷の広間に通された。(中略)

「まだお食事までには大分時間がございませうが(中略)、

先生も御参詣なすつてはいかかでございます。」

(前略) 博士は細君が金毘羅に詣ることのあるのを思出した。(中略)

子供が病氣などをすると(中略)、虎の門の金毘羅へ祈禱を頼みに行く。

(前略) 「先生。とうとう金毘羅にお出でなさらずに、

お立になりますなあ。」(前略) 一月十日には自分が高知から

琴平へ着いて、象頭山の麓にある宿屋へ這入つて、小川が一晩泊つて

参詣しろと云うのを、無理に参詣せず立つたのである。

丁度その日湯に入った赤ん坊が咳をし出す。

それは湯で風を引いたのであるが、その時百日咳らしい子供に

湯屋で逢つて、跡で赤ん坊が百日咳になる。

(前略) 幸いに細君は(中略)、その琴平に金毘羅の本家があるやら

知らないから好いやうなものだが、若し自分の金毘羅を

冷遇したことが分かつたら、どんなにか氣にするだらう。

兎に角、琴平の話はしない事だと思つたのである。(後略)

「金毘羅」より 森鷗外著

※原文通り表記。風邪のこと



“こんびらさん”の呼び名で親しまれている金刀比羅宮は、象頭山の中腹に鎮座し、785段の石段を登った先に現れる。大物主神と崇徳天皇が祭られている



琴平花壇から徒歩10分。天保年間に造られた旧金毘羅大芝居(金丸座)は、現存する日本最古の芝居小屋。昭和60年からは毎年4月に「四国こんびら歌舞伎大芝居」が開催され、全国から歌舞伎ファンが訪れる



琴平花壇からは、目の前を流れる金倉川とそこに架かる「鞘橋」が見える。刀の鞘のような反りのあるカタチからその名が付いた。銅葺唐破風(どうぶきからはふう)造の屋根をのせた、橋脚のない珍しい浮橋



「延寿閣」は10畳の和室と7畳半の次の間からなる。明治の風情を残しながらも快適に過ごせる客室だ



かつての客室は山の斜面に点在する離れ屋のみであった。以前のパンフレットにもその様子が描かれている



2008年に全館リニューアルを行った琴平花壇。2008年8月には、3階建ての「松月テラス棟」がグランドオープンした

高松スタイル

# Anki

Vol.04 September 2009 [あんき]

## 【安気(あんき)】

心に苦しみがなく、気楽でのんびりしていること。また、そのさま。讃岐弁では、のんびりと心晴れやかな人のさまを表して「安気でええのう」という風に使う。高松スタイル「Anki」は、讃岐の暮らしの中に眠る「日常の豊かさ」に光をあてながら、新しい高松ライフを提案する大人の文化情報誌です。

## CONTENTS

### 住むなら都？都心暮らし

夫婦で街中セカンドライフ ..... 04

バリアフリーで暮らせる街 ..... 06

老朽ビルが個性派住居に変身!? ..... 07

長老に聞く、街中暮らしの極意 ..... 08

SHOPの顔 ..... 11

宮武書店 / 小西隆史さん (48)

センコヤ / 福家恵一さん (69)

ROOTS

丸亀町のルーツ、金毘羅五街道 ..... 12

HISTORY

さめぎの歴史を探る [IV] ..... 16

盆の上の小宇宙、讃岐の盆栽

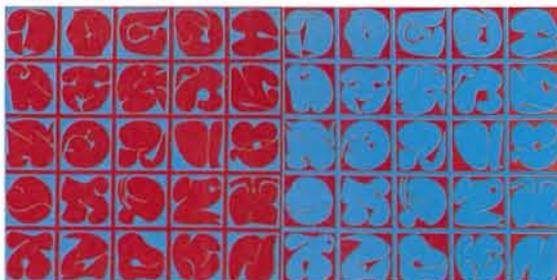
### 丸亀町再開発ニュース

進化する「丸亀町B・C街区」 ..... 18

VOICE

香川版「ダ・ヴィンチ・コード」登場!? ..... 22

### 表紙作品



川島 猛 作 「RED on BLUE on BLUE on RED 1966-N.Y.200」 1966年制作  
233.7cm×467.4cm アクリル、キャンバス



川島 猛 かわしまたけし

1963年の渡米以来、セクシーで有機的な形が規則正しく並ぶ作品を数多く発表。この作品は、ハレーションを起こす青と赤の抽象形体が、目に熱いほどの刺激を与える。キャンバスの上に描かれた作品だが、四角い格子の中で生命体がうごめいているようにも感じる。



森 鷗外

もり おうがい (小説家)

文久2(1862)年、島根県に生まれる。明治14年、東大医学部を卒業し、陸軍軍医となる。明治17年から21年までドイツに留学し、医学を学ぶ。文学、哲学、美学への造詣を深める。明治23年、小説「舞姫」を発表。明治40年には陸軍軍医総監となり、軍医行政のトップの地位に着くが、創作への意欲は衰えず、「高瀬舟」「阿部一族」ほか、多数の小説、翻訳、評論を残した。

短編小説「金毘羅」が発表されたのは、明治41年のこと。主人公の小野博士が琴平を訪れたものの、金刀比羅宮に参拝せずに帰京してまもなく、赤ん坊を病気で失い、上の娘も患ったという出来事を、夫と妻との金毘羅信仰への温度差を絡めて描いている。当時、陸軍軍医総監だった鷗外は、前年1月に琴平で1泊したと日記に綴っている。実は、その1ヶ月後に次男・不津を百日咳で亡くし、またその1ヶ月後に長女の茉莉がようやく病床から起き上がったという出来事があり、「金毘羅」は自分の琴平滞在と子ども達の病気の因果を意識した作品となっている。

花壇は、寛永4(1627)年創業の老舗旅館、若女将の三好りつ子さんによれば、鷗外が宿泊したのは、離れ屋の「延寿閣」のこと。「延寿閣」は日本的な情緒を残した数奇屋造りで、座敷からは落ち着いた庭園の緑や金倉川の流れをのぞむことができる。当時は全ての客室が山の斜面の庭園に点在する離れ屋で、最盛時には20室ほどあったという。現在、残る離れ屋は、「延寿閣」のほか、「長生殿」「泉亭」の3棟。当時の趣はそのままに、大切に手を入れながら守り続けている。「琴平花壇」には、鷗外の他、北原白秋や与謝野鉄幹・晶子夫妻らも投宿し、多くの文豪たちから愛された宿としてその名を知られている。



昭和30年代頃と思われる「延寿閣」。森鷗外が宿泊してから100年以上になるが、現在も客室として使われている。平成7年には保存のための大工事を行い、その費用は新たな離れ屋が2棟も建つほどだったそう  
写真提供/琴平花壇

住めば都、住むなら都

# 都心に暮らす

「郊外の庭付き一戸建て」。

かつて誰もが憧れたマイホームの姿が、

少しずつ変わり始めている。

ここ数年、高松市の中心部はマンションラッシュ、

にわかに都心回帰が進んでいる。

住めば都、住むなら都？

まちなか暮らしの今を訪ねた。



マンションの通路から  
丸亀町のガラスドームをバックに



今日は気になるあの店に行ってみよう。日常の買い物もちょっとした探検気分

# 玄関出たらすぐ三越 高松の一等地に住む



「これからは住人の一人として、もっと町内活動にも参加したい」と抱負を語る是永さん夫婦



ある日曜日、丸亀町商店街のドーム広場ではライブが催され、家族連れの買い物客で賑わっていた。街の喧嘩を肩越しに、私は、丸亀町一番街の上階にあるマンションの一室を訪ねた。マンションから高松三越まで歩いて100歩余り。建物の通路からは商店街のアーケードが見下ろせる。「商店街に住むと言っても、建物の中は静かですよ。そう言って部屋に招き入れてくれたのは、是永武志さん(65歳)と弘子さん(62歳)。ここに住んでもうすぐ2年半になる。

## 夫婦2人になったら、便利な所でマンション暮らしを

「妻とは、年を取ったら便利な所でマンション暮らしをしよう」と話していたんですよ。車の運転を考えると、70歳までにはって。

是永さんが、家族と共に東京から転勤してきたのは今から20年前のこと。気候も人も穏やかな讃岐の土地柄が気に入る、赴任して数年後には職場近くの郊外にマイホームを建てた。2人の子どもを育て、休日には庭の手入れや家庭菜園、近所の人たちとスポーツ



## 便利さ以上の産物

「夕飯の支度で何か足りないと思えば、すぐに三越のデパート地下がありますし、商店街には八百屋やお豆腐屋さんもあるので、生活には困りませんね」と話すのは弘子さん。確かにまちなか暮らしは便利だが、その分生活費もかかるのでは？

「それが意外とそうでもないんですよ。量り売りで必要な分だけ買うので無駄がないし、何より買い置きが必要がないので、余分なものを買わなくなりました」。武志さんも「駐車場代は前より高くなりましたが、たいていは歩いて事足りるからね。その分、ガソ



以前買った店でベルトを修理。こうした細やかなサービスが受けられるのも商店街ならではの



野菜は亀井戸水神市場で。生産者から厳選した安全な地元野菜が毎日店頭で並び

リン代が1/5ぐらいになりましたよ」と、まちなかの暮らし心地を語る。何より一番の変化は、よく歩くようになったこと。朝はサンポートの赤灯台まで往復小1時間、潮風に吹かれながら散歩で汗を流す。夕飯の材料を買いに、夫婦で商店街を歩くのも日課になった。「今日はいつもより遠い魚屋へ」と街を探索しているうちに、今まで気づかなかった路地裏の面白さも知った。「自分でやっていると、言うより、この立地条件がそうさせ

ているんだと思います。歩くようになって、自然と夫婦で過ごす時間も増えたと言う。また「引越しを機にシティボーイになろうと思って。40年ぶりにGパンを履いたらすっかりハマって」と武志さん。パジャマ姿で新聞を取りに行けなくなったが、人に見られるという刺激が日々の暮らしに程よい変化を与えてくれる。是永さんのまちなかセカンドライフは、まだまだ始まったばかりだ。

photo: 仁田貴夫

# まちなか暮らしで 手に入れた 「当たり前前」の生活



こうして車椅子で歩いていると、声をかけてくれるご近所さんも出来ました



周辺には一人暮らしの高齢者が多いため、けやき市場では卵は1個から、大根も半分と必要に応じて小分けしてくれる



「今日は卵何個?」「じゃあ3個。」「それなら110円ね。」そうやって、彼女は八百屋の店内をスイスイと車いすですまわりながら買い物済ませた。その間、お店の人との会話が絶えない。「こうやって普通に買い物があったかっただけです。」

「老後の不安もありましたし、いろんな意味で私が一人で暮らすには、徒歩圏内で暮らせる都心しかなかった」と語る安藝さん。

## 障害を乗り越えて

安藝さんは「先天性骨形成不全」という難病を抱えて生まれた。生まれつき骨がもろく、くしゃみや寝返りをするだけで骨が折れてしまうため、子どもの頃は家の中で生活のすべでだった。やがて体の成長と共に徐々に症状が緩和されると、安藝さんの興味は一気に外へ向いた。「いつもテレビの中で観ていた街へ行きたい」。学校の友人と商店街でショッピングをしたり、映画を観たり。思春期の女の子が普通に経験する楽しみも味わった。しかし彼女にとってそれは決して易しいことではなかった。車椅子で移動するには駐車場がなければ乗降出来ない。しかも当時は郊外に住んでいたため「ふだんは自分の足でジュース1本買えなかった」と振り返る。



よく行く片原町商店街のけやき市場にて。「お店の人との何気ない会話からいつも元気をもらってます」と安藝さん

安藝さんが勤める「(株)ユニバーサルデザイン・メディア工房」では、視覚障害者に配慮したウェブ制作や、地元企業と障害者施設との共同事業のコーディネートなど、障害者の自立支援を行っている

## 多様な人が共存できる バリアフリーな街に

「自立した生活」を望んだ安藝さんは、高校卒業後、健常者と一緒に働ける職場を選んだ。身障者のリハビリセンターでの医療事務などを経て、現在はIT関係の会社で週3日通勤、2日は在宅就労をしている。

そんな安藝さんが一人暮らしを決めたのは3年前のこと。これまで世話をしてくれていた父親が高齢で介護を要する様になり、これ以上負担をかけたくなないと、自立を決意したと言う。



将来マンションを売ることを想定して、大掛かりなリフォームはせず、ちょっとした工夫で家の中の課題を克服

「老後の不安もありましたし、いろんな意味で私が一人で暮らすには、徒歩圏内で暮らせる都心しかなかった」と語る安藝さん。

て自力で職場まで通勤している。また彼女にはもう一つ、まちなか暮らしを選んだ理由がある。「バリアフリー」という視点から、障害者だけでなく、高齢者や妊婦さん、子どもにもやさしい街になってほしいと思ったんです。それには、まず自分が住民として参加しないと何も変わらないだろうと。ハードだけじゃなくて心のバリアフリーもね。」

街に住んで一番よかったのは「孤独じゃない」こと。家の中では一人でも一歩外に出れば、いつも周りに誰かがいて見守られている安心感がある。「確かに大変なこともあるけれど、まちなかでの一人暮らしを選んだことは後悔していない」と、安藝さんは清々しく語った。



# まちなか暮らしの ニユースタイル



ゆったりとした時間が流れる店内は、常谷さんの分身のよう

十人いれば十通りの暮らし方が出来るのが都会暮らしの良さ。職業も生き方も異なる異人種たちが隣り合せて暮らすことは、新しい何かを生み出すと同時に、改めて「コミュニティ」のあり方を私たちに問いかけてくる。

**セルフリノベーションで甦ったビル**

商店街から横丁に入ると、繁華街のネオンの間に、年季の入った白いビルが見えてきた。かなり使い込まれたその建物は、「アカネビル」という名の通り、どこか懐かしさ、人の温もりを感じさせる。

このビルの2階でアンティーク雑貨店を営む常谷良太さん(29歳)は、上階アパートの住人兼管理人でもある。大家さんとは以前から



海外のアンティーク雑貨がセンス良く並ぶ



アカネビルの外観

知り合いで、店舗物件を探している時に、ふとこのビルが目にとまりました。

た。しかし大家さんは最初、長らく荒れ果てたこのビルを貸すつもりはなかったと言う。貸せるようにするには改装しなければならぬからだ。けれど、常谷さんには放置されたそのままの状態が魅力的に見えた。「ここにいろんな職種のクリエイターが住んだら面白い！」早速大家さんと交渉し、自ら管理人を引き受ける条件で入居者を募集。家賃は破格の2万円以下。その代わり、内装や設備工事はすべて入居者が自力で行う。「部屋に入れば床が腐って足がズボツと入るし、最初は肝試しみたいだった」が、口コミで集まった入居者は、建築家やデザイナー、パリの店長など10名余り。お陰で入居者の数だけ個性的な部屋が出来た。ちなみに部屋を出る時は、敷金の代わり

りに、前入居者が手を入れた内装費の一部を後入居者が負担する。このユニークなスタイルが口コミで広がり、今では常に空室待ちの状態だ。

**異人種の集まりから生まれたもう一つの大きな家族**

「最初は住人みんなが知り合いで、大きな家族”って感じでしたね。お互い工事を手伝ったり、中にはそれが縁で結婚したカップルもいました」と常谷さん。

家族的な近所付き合いは今も変わらないが、オープンから7年経ち、最近は知らない入居者や家族連れも増えてきた。住民が多様化すれば、当然価値観や生活習慣にギャップが生まれ、互いに干渉しないことでバランスを保つようになる。しかし常谷さんは今でも自ら家賃を集金し、苦情があれば両者が納得するまで話し合う。決して顔の見える関係を怠らない。



3階の一室で輸入生地などを扱う「atelier marimarie」



「ここから店を出したいと思った」と語るオーナーの杉山万理子さんはアカネビルの常連さん。2年前にこの店を開いた

- Data**
- dodo
    - TEL / 087-826-6003
    - 営業時間 / 12:00~19:00 (日曜のみ18:00まで)
    - 休 / 木曜
    - BLOG / [http://blog.livedoor.jp/dodo\\_nap/](http://blog.livedoor.jp/dodo_nap/)
  - atelier marimarie
    - TEL / 050-8805-5810
    - 営業時間 / 11:00~17:00 (金曜のみ20:00まで)
    - 休 / 日・木曜
    - URL / <http://www.marimarie.com/>



自慢のご自宅を拝見。床は自分で無垢材のフローリングに仕上げたそう



夜は仲間たちと飲み会。飲んで徒歩で帰れるのもまちなか暮らしの魅力

「この居心地の良さは、手間のかかる住居だからこそ出来たのかもしれない。新築マンションの様に何でも便利に整っているわけではないので、隣人同士が無関心じゃられないんですよ。お互いがそれぞれの生活を尊重しあわないと成り立たない。いろんなことを他人任せにしてたら実現しなかったと思います。」

思いがけない骨太な答えが返ってきた。自分らしく暮らすために、自らの生活に責任を持つ。そんな当たり前のことが当たり前でなくなった時代だからこそ、彼らの言葉はズシリと重い。



懐かしそうに当時を振り返る尾崎ご夫妻

# 街と共に生きて半世紀 まちなか暮らしの 極意を聞く

商店街を歩いていると、よく見かける老紳士がいる。背筋をピンと伸ばして闊歩するその人は、街中の人たちと親しげにあいさつする。知人らしきご同年はもちろん、孫世代の若者や工事現場の警備員にまで、笑顔で気さくに話しかける。

「お茶の亀屋翠松園」の会長尾崎登さん(91歳)は軍人の家に生まれ、自らも陸軍習志野学校を卒業後、職業軍人として終戦を迎えた。その後、丸亀市から高松市へ移住。あれから半世紀余り、まちなか暮らしの達人にその極意を聞いた。

【戦後】  
「商売するならここが  
四国で一番だと  
思ったんですよ」

——そもそもなぜ高松に住もうと？

登(以下敬称略)「心機一転、商売を始めるならどこがいいか各地を調べたら、丸亀町のこの土地が四国一だと言っているので、一度も高松に来ずに土地を買いました。私は軍隊時代、いろいろ調査のノウハウを学びましたね。戦場で物資調達するのに、市場調査や輸送、買い付け、配給まですべての戦略を立てる役だったんですよ。

今で言う一種のマーケティングですわな」。

隣にいた妻の翠さん(87歳)も往時を振り返る。

翠「あの頃は子どもを背負って、丸亀から弁当を下げて、電車で高松まで通いました。辺り一面ほとんどに焼け野原で。商店街の辺りにはムシロを敷いた露天商がたくさんいました。よく覚えてるのは人通りがとて多かつたこと。焼かれて物が何もない時代でしょ。だから何しても売れたわけなんですよ」。

登「そのうち店が1軒、2軒建ち、だんだん街らしくなって、うちも昭和21年8月にバラック小屋を建てて商いを始めました。最初は夜行列車で2日かけて東京の大森まで行き、リュック一杯に海苔

を仕入れて売りました。

昭和25、6年頃になって、ようやくお茶を扱うようになりました。宇治の木賃宿で出会った薬屋さんに付いて山奥を訪ね歩き、その部落で一番美味しいお茶農家を教えてもらいました。最初はなか



昭和20～30年頃のまちなか暮らしの様子



陸軍曹長時代の登さん



◀かすりの制服が目印。多い時には従業員が25人もいた

昭和30年代に入ると、世の中は一気に高度経済成長期へと加速した。登さんは高松で「早く地下1階、地上3階の鉄筋ビルを建て、上階は中央企業の支店事務所として貸し出した。まだ中央通りのオフィス街がなかった時代。この後、高松の街は支店都市として飛躍を遂げてゆく。

登「高松には早くから日銀の支店長さんや、東京から優秀な人たちがようさん来られていました。その方たちと交流させてもらいましたよ。何しろ田舎にいなから日本の最新情報がわかるわけですからね。」

もちろん華やかだったのは、商売だけではない。料理屋さん登「百間町辺りには、料理屋さん

「遊ぶのも社会勉強。あの頃は街にゆとりがありました」

なか分けてもらえなかったけど、それでも気に入ったもんやから、2回3回訪ねるうちに、少しずつ取り引き出来るようになりました。お陰で今でも、親子3代お付き合い合いですよ。」

その頃のまちなかの暮らしはどんな様子でしたか？

登「戦後10年ぐらいは、田舎の農家さんが街まで肥を取りに来ていました。代わりに収穫期には野菜やお米を届けてくれるんですよ。魚はいただきさんが売りに来てくれるし、ご近所に八百屋さんもあつた。よろずやさんですわね。お肉屋、魚屋、米屋、酒屋…、専門店もずいぶんありました。昭和50年頃までですかね。ついこの前ですよ。」

が何軒もあつて、芸者さんが大勢おりました。私も先輩に連れて行ってもらいました。商売も順調でしたから気楽なわけですよ。遊ぶと言っても社会勉強の場でもあります。よく芸の肥やしというところがありました。」

一方、店の切り盛りはもっぱら女性の仕事だ。

登「その頃は住み込みのお手伝いさんが3人いて、子どもの世話や食事の面倒をしてくれていました。他にも配達アルバイトの学生さんが5人くらいおつてね。皆うちで晩御飯を食べてから、定時制の授業に通っていました。つい先日、その中の一人が奥さんと一緒に訪ねてくれましたよ、定年になりましたって。」



昭和26年頃のお茶の亀屋店内



新茶を売り出す姿が初夏の風物詩に。昭和40年頃

「いいイメージを盛り立てるからこそ、土地が生きる」

バブル以降、地価が高騰し、まちなか住人はめっきり減った。そんな中、尾崎さんは90歳を越えた今も店の上階に住み、毎日必ず店に顔を出す。

登「街が変わったことで一番残念なのは、やっぱり商店街に住む人が減ったことやなあ。昔より商売の話はようするようになったけど、個人的な付き合いは少なくなりました。だから私は自分からいろいろんな人に話しかけるようにしているんですよ。あいさつする時はね、こうやって手を上げて、歯を見せて笑うんですよ。敵意はないって、相手にちゃんと伝わるようにね(笑)。それから私は苦手な人ほ

とにかくあの頃は無我夢中で働いていましたから、しんどかったかどうか覚えていません。たまの楽しみと言えば、地元においでたおばあちゃんがマツタケ狩りに誘ってくれたり、町内会で子どもたちを連れて海水浴に行ったり。新米の私にも皆さんよくしてくれましたよ。」

「そして現在」

とにかくあの頃は無我夢中で働いていましたから、しんどかったかどうか覚えていません。たまの楽しみと言えば、地元においでたおばあちゃんがマツタケ狩りに誘ってくれたり、町内会で子どもたちを連れて海水浴に行ったり。新米の私にも皆さんよくしてくれましたよ。」

都に暮らすのは人であり、器は住む人たちによって作られる。だとすれば、これからの誇りに思える都に住めるかどうかは、住民自身の手にかかっているのかもしれない。

(小西智都子)

ど自分から率先して声をかけます。いろんなものを頼んだり頼まれたり、日頃から親しくせんとね。でも、見たらいかんところは見ないのも優しさ。人それぞれ個人の暮らしがありますからな。」

実際に住んでみて、ここは本当に四国一の場所でしたか？

登「もちろん今もそう信じています。この街でやってきたという自負がありますから。いいイメージを盛り立てるから、土地が生きる。土地が生きるから、豊かに暮らせる。その逆もあつて、悪いことしたらここはどより目立ちます。だからこそ、街に恥じないよう皆この町の住人であることにプライドを持っているんじゃないですか。」

都に住めば幸せか。その答えは一通りではないが、「街に対する自負」という尾崎さんの言葉が心に残った。そこには都を享受するだけでなく、自らも都を創ってきたという誇りがある。むしろ、こういう自負ある住民が脈々といたからこそ、都になったとも言える。

時代が変わっても、都という器に暮らすのは人であり、器は住む人たちによって作られる。だとすれば、これからの誇りに思える都に住めるかどうかは、住民自身の手にかかっているのかもしれない。

(小西智都子)



休日は趣味の乗馬や翠さんと温泉へ出かけるのが楽しみ



仕入れで日本中を車で走ったという登さん。今も現役ドライバーだ

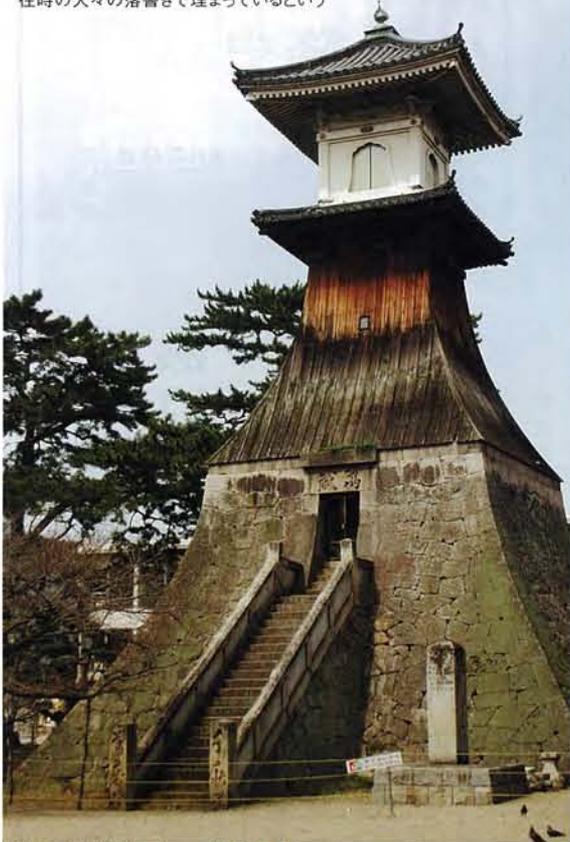


ちょっとしたまちなかの用事は今でも自転車を愛用





ことでん琴平駅の隣に立つ高燈籠。石積みの台座の上に、二層瓦葺の木造灯籠がそびえる。立ち入りはできないが、内部の柱や壁、階段には、往時の人々の落書きで埋まっているという



「太助灯籠」は天保5(1833)年に江戸在住の人々が浄財を出し合って建立した。台座には「江戸講中」の文字と寄進者らの名前が刻まれている



「丸亀町」のルーツをたどって

# 金毘羅五街道とらさん

江戸時代、庶民にとって

「こんぴら参り」は伊勢参りと並んで「二生に一度は」と憧れた旅。

参詣旅行ブームとともに、

金刀比羅宮へと続く街道は発達し、門前町には

江戸や大阪にひけをとらない

立派な芝居小屋も建てられた。

かつて人々が夢見たこんぴらさんは、

時が流れた現代にあっても、

全国にその名を知られた

名所であることに変わりない。

江戸情緒を探しながら、

金毘羅五街道とこんぴらさんを散策する。

中/丸亀街道沿いには、街道の起点である中府から何丁きたかを示す丁石が残る。平成17年には、5丁、20丁、90丁、110丁の4ヶ所に「平成の丁石」が建立されている

下/丸亀街道の終着点で高燈籠とともに参詣客を出迎えるのは約20基の並び灯籠。高燈籠の南にある通りは、かつて金毘羅参詣のメインストリートだった

# すべての道は こんぴらに通ず。

金刀比羅宮のある象頭山からは、東西南北に放射状に伸びるいくつもの街道がある。それらの中でも、特に発達した5つの街道を金毘羅五街道という。

## こんぴらふねふねで丸亀の港へ

金毘羅五街道とは、丸亀街道、高松街道、多度津街道、阿波街道、伊予・土佐街道の5つの道。中で最も人の往来がにぎやかだったのが「丸亀街道」といわれている。江戸や大阪からの参詣者は、大阪から海路で丸亀へと渡るのが一般的であった。大阪の港からは、丸に大きな金の字が染め抜かれた帆を

立てた金毘羅船が毎日のように出航し、「太助灯笼」を目印に丸亀港に入港したという。高さ5m、蓮の花を模した青銅の灯笼は、船着き場であった新堀港に現在も残る。

丸亀の港に上陸した参詣者は、金毘羅をめざし、一路、南へ。人々は高台にそびえる丸亀城を仰ぎながら歩みを進めたであろう。優美かつ堅牢な石垣があること、知られる丸亀城は、生駒親正が5年の歳月を費やして築いた支城。ちなみに三代・生駒正俊が丸亀城から高松城に入った際、高松城下に丸亀商人を移住させたことが商人の町「丸亀町」が誕生するきっかけとなった。

## 高松城下から金毘羅を目指す

丸亀から金毘羅までは150丁、約12kmの道のり。街道沿いには、金毘羅までの距離を刻んだ丁石や一里塚、休息のための茶室が設けられ、参拝者により寄進された灯笼や道しるべが建てられた。丸亀街道は、他の街道に比べ、今も昔の名残を多く残しているといわれている。街道の起点となる丸亀市中府口には、金刀比羅宮の一の鳥居である通称「中府の大鳥居」が残っている。明治初期、山口や堺、青森の商人らによって寄進されたものだ。かつて街道沿いには一丁ごとに約150本の丁石があった。参詣者たちは「ああ、五十丁きた、百丁歩いた、あと何丁だ……」と丁石に励まされ、金毘羅へと向かったであろう。現在も街道には数本の丁石がポツンポツンと残る。

## 高松城下からの殿様の道

丸亀街道より後に開かれたのが、高松城下から金毘羅までの八里、約32kmを結ぶ高松街道である。寛永19(1642)年に松平頼重が高松藩主となつて以降、歴代の藩主がたびたび金毘羅参詣をしたことから、この街道は「殿様の道」「お成道」として整備が進んでいった。



丸亀町商店街北端にある丸亀町ドームのあたりが高松街道の出発点



新町商店街東口にある「一の鳥居」。鳥居の脇には、「旧高松街道」と刻まれた街灯がある

高松街道の起点は、高松城大手門前の常盤橋南詰。丸亀町ドームの北側、三越百貨店と高松中央郵便局あたりである。

高松街道は、現在の国道32号線とほぼ同じ道筋で、讃岐平野の田園地帯を横切り、高松から円座、陶、滝宮、岡田、榎井を通過して琴平にたどり着く。

現在、アーケード街となっている新町商店街の東口は、「新町の四辻」といわれ、伊予・土佐街道を除く四街道がこの四辻で合流する。ここには「一の鳥居」と称された鳥居も立つ。地震や火事により破損し、江戸の昔よりも若干、東側に移動し、再建された。

新町商店街を西へ抜けると、琴平の町の中心を流れる金倉川とそこにかかる一之橋が現れる。ここが高松街道の終着点。かつてはこの一之橋の位置に、屋根つきの木造橋、鞘橋がかかっていた。銅葺唐破風造の三連屋根を持ち、橋脚のない浮橋の姿は刀の鞘のようにも見え、そこから鞘橋の名がついた。明治末期の橋の架け替え工事に伴い、一之橋から約450mほど南に移築され、現在は神事専用の橋となり、金刀

比羅宮の御旅所で行われる10日の大祭時のみ、神輿が通るのに使われている。

丸亀街道、高松街道のほかに、九州など西国からの参詣者が多く利用した「多度津街道」、徳島県から峠越えの険しいルートを通る「阿波街道」、幕末の偉人も通ったと伝えられる「伊予・土佐街道」があった。自由な旅が許されていなかった庶民にとって、金毘羅詣では信仰の旅であると同時に、日常から開放される娯楽の旅。参詣者たちははやる気持ちを抑えながら、それぞれの街道を歩いたに違いない。

琴平の老舗旅館「琴平花壇」の目の前を流れる金倉川と鞘橋。洪水で何度も流失し、現在のものは明治2年に作られ、明治38年にこの場所に移築された



丸亀港の一角、新堀港南に立つ「太助灯笼」。当時、3基が建てられたが、2基は戦時に金属供出され、現在はこの1基のみが残っている



高さ60mある丸亀城の石垣は、「扇の勾配」といわれる美しい曲線を描く



標高約70mの山の上に築かれた丸亀城。現存する木造天守閣の中では日本一小さいといわれているが、その姿は丸亀市街のどこからも目にする事ができる



中府の大鳥居は、花崗岩で造られており、高さ約6.7m、柱の間約4.5mの立派なもの。額には「金刀比羅宮」、西の柱には「天下泰平」、東の柱には「海陸安穩」と刻まれている



# こんぴらさんで江戸情緒に触れる

「四国・讃岐のこんぴらさん」として親しまれる金刀比羅宮。こんぴら名物の石段は、本宮まで785段、さらにその上にある奥の社までは1368段続く。

## 意気揚々から消沈へ 加美代館で元氣復活

最初は意気揚々、しかし、悔しいかなだんだんと意気消沈。石段をたった百段登っただけで足が重い。金毘羅五街道を歩いてきた

先人たちならこの程度の石段にひるむことなどなかっただろう。今一度、気持ちを奮い立たせて石段を見上げる。

365段目には高松藩主の松平頼重が寄進した大門が構え、ここから奥が金刀比羅宮の境内となる。境内は高い禁止だが、五人百姓という5軒の館屋だけは、金刀比羅宮の神事に奉仕していた家筋であることから特別に許されている。「お疲れが取れますよ」。そう勧められ、キラキラと光る黄色い館を口に運ぶ。「加美代館」という名のべっこう館は、ほんのり

ユズの香り漂う懐かしい味がした。  
主人に代わって  
こんぴらを  
目指す犬

桜馬場と呼ばれる石畳の道をぬけた広場の一角に人だかり

があった。輪の中には「こんぴら狗 こん」の像。ブームになったとはいえ、参拝には多大な時間と費用を要し、誰も彼もが旅に出られたわけではない。そこで人々はグループで費用を積み立て、代表者が参拝に行く「代参講」でこんぴら参りを果たしていた。その代参を飼犬にさせたのが「こんぴら狗」である。犬は首輪に「こんぴら参り」と書かれた木札や初穂料道中の路銀を入れた袋を下げ、旅人から旅人にリレーされながらこんぴらさんを目指した。

「こん」はそのこんぴら狗のキャラクター。こんの頭は、大勢の参詣者たちになでられ、ピカピカに光っていた。

## 森の石松も間違えた 威風堂々の旭社

気がつけば628段、旭社まで来た。「この旭社を御本宮と勘違い



全国から寄進された数千両を費やし、約40年をかけて作られた「旭社」。柱や扉にはいたるところに鳥獣、植物、人物などが刻まれ、上層の屋根裏には巻雲の彫刻が幾重にも重なっている



して引き返したのが、清水次郎長親分の代参でやってきた森の石松なんです。観光客を案内するガイドの声に「なるほど」と納得する。高さ約18m、銅板葺で二層の入母屋造という威風堂々とした佇まいの上、いたるところに施された彫



こんぴら名物のひとつ「石段駕籠」。石段のふもとから境内の入り口にあたる大門までの365段を駕籠に乗せてつれていく



桜馬場の両側には全国から寄進された石灯籠と桜並木が連なり、春には見事な桜のトンネルとなる



こんぴら狗のこんは観光客の人気もの。こんぴら狗に出会った旅人は面倒を見ながら自分の目的地まで連れて行き、次の旅人に犬を託した

白い大きな野点傘を上げ、「加美代館」をすすめる館屋「五人百姓」。扇形をしたちょっと固めのべっこう館で、館を割るための小さなカナヅチが添えられている



「こんびら歌舞伎大芝居」の上演時には、小屋の正面に役者番付と演目の名場面が描かれた錦絵が掲げられる。金丸座は昭和40年に営業を中止して以来、放置されていたが、その後、保存運動が盛り上がり、昭和45年に国の重要文化財に指定され、昭和51年に元の場所から500mほど離れた現在の場所へ移転し、復元された



刻は仄巻だ。  
残念なことに森の石松は清水への帰路の途中で騙し討ちに会い、殺されてしまう。ちゃんと本宮に詣でていれば、石松にも違う人生があったかもしれない。

### 1段下がって 786ことなく

旭社を経て、賢木門をくぐった先に一段だけ「下がっている石段」がある。実は、本宮までの「上がる石段」は786段あるのだが、786は「なやむ」の語呂につながる。ここで1段下がることによって、786段→1段→785段としたらしい。

この石段を下がったら、最後の難関「御前四段坂」と呼ばれる急な石段に挑む。生い茂る樹木が日陰を作り、汗ばんだ身



枡席を区切った歩み板の上をスイスイと歩き、お客さんを席まで案内するのはお茶子さん。お茶子は県内を中心に応募してきたボランティアの方々



金丸座に入るには、腰をかかめながらくぐり戸を通る。下足なども昔のままに並び、細部にわたって江戸時代の様子を残している



金丸座までの道沿いには、役者たちの名前を染め抜いたのぼりがはためく

### 昔も今も変わらぬ 参拝後の爽快感



「御前四段坂」という急な石段の先に見えるのが「御本宮」。鬱蒼とした樹木に覆われ、夏でもひんやりしている

本宮にまつられている祭神は、大物主神と崇徳天皇で、五穀豊穰、豊漁満帆、商売繁盛、医薬技術等々、さまざまな方面に神徳があるが、一番知られているのは海上安全だろう。  
金刀比羅宮を「こんびらさん」

体をクールダウンしてくれる。足元だけを見ながら一段、また一段。最後の一段を踏みしめて顔を上げれば目の前に本宮が鎮座していた。

と呼ぶのは、明治以前の祭神が金毘羅大権現であったことに由来する。金毘羅とはガングス河に棲むワニを神格化した河の神「クンビラ」のことで、河を行き交う船の安全を見守る神であった。そこから「海の神様こんびらさん」として厚い信仰を集めるようになった。  
本宮前の展望台からは、琴平から丸亀へと続く街並みが一望でき、晴れ渡ってれば瀬戸大橋もくっきりと見える。江戸時代の参詣者が目にしたのはまったく異なる風景だろう。しかし、785段の石段を登り、本宮を拝した後のすがすがしさは、江戸の昔も現代もさっと同じに違いない。  
参拝を果たした江戸の昔の人々は、こんびらさんのお膝元に広がる門前町で旅の疲れを癒した。芝居小屋もそんな旅人たちの娯楽の殿堂だった。  
旧金毘羅大芝居、通称金丸座は、現存する芝居小屋としては日本最古のもの。160年以上前に千両の大金を投じて建てられ、内部には当時の構造を残している。「本花道」と「仮花道」の2本の花道、役者が登場する「スッポン」と呼ばれる穴、役者が早代わりで出入りする「空井戸」という空間、客席の上から花吹雪を降らせるために竹を格子状に組んだ「ブドウ棚」など、浮世絵に描かれていそうな仕掛けが見られる。  
この金丸座に中村吉右衛門ら3人の歌舞伎役者がテレビロケで訪れ、「ここで歌舞伎ができれば」と希望したことが契機となり、多くの関係者の努力

### 娯楽の殿堂復活 日本最古の芝居小屋



海拔251m、象頭山の中腹に鎮座する本宮。改築を重ね、現在の拝殿は明治初年に造営されたもの。本殿の屋根は檜皮(ひわだ)葺で、平成16年の遷座祭の折、新しく葺き替えられた

によって昭和60年、ついに歌舞伎公演が復活した。今や「四国こんびら歌舞伎大芝居」は香川の春の風物詩となっている。  
このようにこんびらさんには江戸情緒を満喫できるスポットが数多く残る。その一方で、平成16年の「平成の大遷座祭」を機に琴平山(象頭山)を再生する「ニューこんびらさん構想」が推進され、御神札授与所や社務所棟、緑蔭殿と呼ばれる参集所が新たに建設され、金刀比羅宮所有の貴重な美術品などを収蔵する6カ所の文化施設も再編成された。参道途中にはカフェとレストランを併設した新茶所「神椿」もオープンし、参詣者の疲れを癒している。  
一生に一度といわず、二度三度、いや何度でも訪れるといい。こんびらさんは古き良き時代を守りながら、たえず進化している。  
(白井ひとみ)



二棟ある絵馬堂には、奉納された船の写真や大漁旗などが所狭しと掲げられ、海の守護神として厚い信仰が寄せられていたことがわかる



眼下には琴平の街、左手には讃岐富士と称される飯野山や瀬戸大橋が見える。人々はこの景色を眺め、785段の石段を登ってきたことを実感する



金丸座は約730人収容でき、1階は木枠で仕切られた枡席、その左右の1、2階に棧敷席がある。舞台と客席が近く、観客は役者の息づかいを感じながら芝居を楽しめる

さぬきの  
歴史を  
探る〔IV〕

# 盆の上の小宇宙 鬼無・国分寺の盆栽

日本の伝統文化を代表するもののひとつ「盆栽」。近年では海外でも「BONSAI」として愛好家が増えている。

高松市鬼無町から国分寺町にかけては、盆栽生産の全国シェア80%を占める産地。一帯は全国的に知られた「盆栽の里」である。

## 松盆栽の礎を築いた 鬼無甚三郎

高松市街から県道33号線を西へ。鬼無町に入ると「日本一の松の産地」「盆栽の里」といった看板が目につく。JR鬼無駅前から五色台の麓へと続く「盆栽通り」には盆栽園が軒を連ねる。さらに西へ進むと、国分寺町に入り、ここでは端岡地区を中心に盆栽園や盆栽畑が点在している。鬼無・国分寺周辺では、主に「黒松」、「五葉松」、「錦松」を生産している。このあたりでの松盆栽の始まりは約二百年前、江戸時代に遡る。文化年間、付近の山野や瀬戸内海沿岸に自生する松を掘り、鉢植に仕立てたところ、金刀比羅宮に参拝した人達が土産品として買い求めたことから広がっていったといわれている。その後、この地では松盆栽づくりの技が磨かれていった。

香川県に松盆栽を根付かせた先人の一人に、江戸時代末期から明治にかけて活躍した鬼無甚三郎がいる。18歳で鬼無村の組頭を務めていた甚三郎は、農作物の栽培に適していなかった鬼無の土地でも育つ盆栽の育成を思いつく。明治15年には京都に出向き、山採り松の植え替えや剪定、針金を使つての整姿作業といった技術を学び、帰郷後は一人研究を重ねた。彼の努力は周囲の農家にも受け入れられ、盆栽は徐々に副業として定着し、人々の暮らしの安定につながっていった。

## 錦松の元祖、 末澤喜市

一方、国分寺町における盆栽発展の最大の功労者といえは末澤喜市である。明治25年頃、末澤翁のもとに持ち込まれた黒松の中に、黒松の突然変異種である



錦松の元祖・末澤喜市翁。盆栽神社には喜市翁を顕彰する石碑もたざむ



樹木や草花をつかさどる神を奉る「盆栽神社」。国分寺町の盆栽集荷場へと続く高台に建つ

「錦松」が発見された。末澤翁はこれを買取って培養し、その2年後、初めて接木に成功、大量生産ができるようになった。当時、国分寺は鬼無ほど盆栽に取り組み農家はなかったが、末澤翁がこの接木の技術を公開したことから、このあたりでも錦松の苗木を植える農家が増えていった。



国分寺町にある片岡瑞松園の盆栽畑。国分寺町や鬼無町にはこのような盆栽畑が数多く点在する

大正時代には、「日清」「末広」など、末澤翁が次々と開発した錦松盆栽の評価が高まり、国分寺の錦松は全国で人気を博するようになった。実は国分寺町には全国でもめずらしい「盆栽神社」なるものがある。盆栽集荷場近くにあり、石碑によると祀られているのは、樹木をつかさどる男神の「久々能智神」と、草花をつかさどる女神の「草野姫神」の二神。地元の盆栽農家の人々が盆栽文化のいつそうの発展を願い、平成3年に建立した。そして、その境内には末澤喜市翁の功績を称える石碑も建っている。

## 3度のブームに 沸いた昭和・平成

昭和から平成にかけては3度の盆栽ブームが起る。「片岡瑞松園」(国分寺町国分)の片岡昌明さん(73歳)は、父の代から専業



▲黒松/黒褐色の太い幹を持つ。荒々しい幹肌、硬く鋭い葉を持つことなどから「雄松(おまつ)」とも呼ばれている。ちなみに「雌松(めまつ)」は赤松のこと。清寿園(国分寺町)所蔵



▲五葉松/短い葉が5本ずつ出ることからこの名前がついた。葉の短さや樹形の美しさから「姫小松」とも呼ばれる。清寿園(国分寺町)所蔵

▲錦松/黒松の変種である錦松最大の特徴は大きく割れる幹肌。樹皮が厚く、亀の甲羅のように裂ける。日清、末広、旭光などさまざまな品種が開発された。専松園(国分寺町)所蔵



国分寺町内で唯一、錦松を専門に手がけている「専松園」の盆栽棚。  
樹齢数十年の錦松をはじめ、手塩にかけた盆栽が並ぶ

で盆栽業を営み、3度の黄金時代を見てきた。最初のブームは昭和6、7年頃。中でも錦松は空前のブームとなり、盆栽畑は錦松の幼木で埋め尽くされた。しかし、太平洋戦争が始まると、戦局の拡大とともに盆栽畑の苗木や正木は抜き取られ、食用畑に転換されたため、盆栽農家は大きな打撃を受けた。戦後の混乱が落ち着いた頃から、盆栽業復活の兆しが見られるようになり、再び畑には緑濃い松の幼木が茂るようになった。

その後、高度経済成長とともに、盆栽は高尚な趣味という風潮が生まれ、第二の盆栽ブームが訪れる。昭和39年の東京オリンピック記念盆栽展、45年の万国博盆栽展などの開催もあり、盆栽愛好家の裾野が拡大、この頃から「BONSAI」という呼称も浸透し始める。「盆栽農家の数も、畑の広さもその頃がピークだった。国分寺から鬼無にかけての山裾はずっと盆栽畑が続いていたほどですよ」と片岡さんは振り返る。



片岡瑞松園(国分寺町)の片岡昌明さん。「香川の盆栽は手頃な価格のものも多く、幅広い人に盆栽に親しんでほしい」と語る

戦後2度目のブームは80年代後半から始まったバブル期。片岡さんのところにも仕入れ業者が次々と買い付けにやってきました。中には、「畑のここからここまで全部」といった豪快な買い方をする人もいたという。そんなバブル期のブームを経



て、現在は、鬼無地区で約90軒、国分寺地区で約60軒の盆栽農家が「松盆栽生産日本一」の看板を守っている。

今や盆栽という言葉は世界共通語。権威あるケンブリッジやオックスフォードの英英辞典にも「bonsai」の語で掲載されているほどだ。2011年秋に開催予定の「アジア太平洋盆栽水石大会(ASPAC)」第11回大会を、盆栽の里・高松市に誘致しようという動きも活発化している。小さな鉢の中で日本人の自然観を表現し、芸術性の高い趣味として発展してきた盆栽。ASPACが開かれれば、盆栽の里、鬼無・国分寺が、世界的な盆栽の聖地になる日も遠くないかもしれない。(白井ひとみ)



◀盆栽の一大産地・鬼無地区をPRする「鬼無グリーンフェア21」。今年4月の開催時には、盆栽や植木など約1000種、計5万点が展示即売された。愛好家にとっては生産者から直接、管理方法などを教わるのが魅力のひとつ

# 進化する商店街

もつと住みやすく、さらに居心地よく

「高松丸亀町老番街」が誕生して3年。再び、丸亀町が大きく変わろうとしている。今秋から来春にかけてオープンするB、C街区は、「小規模連鎖型」という新手法によって、古いものと新しいものを融合させながら、より暮らしに根ざした街を目指す。変わるものと変わらないもの。今まさに生まれ変わろうとしている商店街の姿を訪ねた。

今までにない書店を目指して、リニューアル後をお楽しみに

美術館通り



再開発工事着工前の丸亀町B、C街区（平成20年1月時点）



昭和20年代の丸亀町の様子。  
まだアーケードはなく復興まもない様子が伺えるが、おしゃれをして颯爽と街を闊歩する娘たちが印象的

兵庫町で仮営業中。  
来春、参番街で  
会いましょう！



百間町で営業中。  
丸亀町では永らく  
ご愛顧ありがとうございます。



## C街区 東館 工事区域



## C街区 西館 工事区域





昭和27年頃の様子。丸亀町に初めて登場したよしず張りのアーケード。同じ頃、番町交差点に香川県初の信号機が設置された

18Pメイン写真の中央にあるネオンサインが点灯したところ。当時は珍しく、完成を記念して写真コンテストが行われた

# 商都の顔として 時代と共に発展

開町400年の歴史を誇る丸亀町。中でもB、C街区は、100年続く洋装店や戦後の香川の文化芸術を育てた名物画廊など息の長い店が少なくない。そんな老舗の店



昭和35年、歳末大売り出しで賑わう丸亀町商店街(写真提供/四国新聞社)

主らが語る悲喜こもごもの思い出はそのまま丸亀町の歩んできた歴史を映している。

戦後の焼け野原の中で焼けた瓦の上に商品を置いて売った苦勞時代や、年末の売り出し時期には、夜中の12時でもお客様が絶えなかったという高度成長期。そこには常に人々の暮らしとともに発展してきた商店街の姿があった。

◀昭和30年代に入ると開閉型の天幕式アーケードが登場。商店街周辺にはいくつも映画館が立ち並び、街は映画ブームで賑わった

開発を機に閉店します。長らくのご愛顧有り難うございました



## B街区 東館 工事区域



## B街区 西館 工事区域



# Before

# 消費する街から、 生み出す街へ。

# After

平成20年1月、見慣れた街並みを惜しみつつ、B、C街区の再開発工事が始まった。あれからもうすぐ2年。いよいよ今秋から来春にかけて、大小5つの再開発ビルがオープンし、丸亀町は新たな歴史を刻み始める。

まず今秋完成するB街区「式番街」は、通りの東側2棟と西側1棟の3棟で構成され、それぞれ4階建ての建物に店舗やオフィスなどが入る。またC街区「参番街」は9階建てビルが東西2棟、東棟は年末、西棟は来春の完成を目指す。また店舗フロアの上階には住居スペースを配し、さらに西棟にはものづくりや職人の店を集めた「ファクトリーマーケット」、東棟には「メデイカルモール」など、より生活に密着した機能を充実させる。

工事が着々と進む中、自らもオーナーの一人として再開発に参加する熊紀三夫さん（丸亀町商店街振興組合専務理事）に再開発への思いを聞いた。

あるものを生かしながら  
街を蘇らせる



「まちをつくる」と言っても、まったく新しいものを作ろうというわけじゃないんです。昔から街にあったものをもう一度、

## アーカイブセンター(ソットプロドット事務局)

アーカイブセンターの運営を担う「ソットプロドット(略してソトプロ)」は、イタリア語で「副産物」の意。「街はお買い物だけでなく、いろんな出会いやワクワクや発見が生まれる場所。夢を持った人たちがプレイヤーとして街に参加するお手伝いが出来ればと思っています」と笑顔で話してくれたのは事務局の川田華子さん。すでにアートプロジェクトなど、様々な企画が始まっています。



## ファクトリーマーケット

かつて商店街には、どの店にもその道の「プロ」と呼ばれる職人がいて、ありとあらゆるオーダーや修理に答えていました。街は売るだけでなく、同時に生産の場でもあったのです。そうしたものづくりの機能を復活させようと設けられたのが「ファクトリーマーケット」。陶芸や盆栽、漆芸品や食品加工など、手技を生かして開業したい方を対象に、3～20坪のチャレンジショップを用意しています。申し込み、お問い合わせは、丸亀町商店街のHPから。  
<http://www.kame3.jp/shop-invite/>





時代に合わせた形で取り戻そうとしていただけなんですよ。開口一番、熊さんはこう切り出した。

丸亀町が進める再開発事業の中でも、B、C街区の一番の特徴は「小規模連鎖型」という新手法を取り入れたことだ。広大な土地を買収して更地にビルを建てる従来型と違い、既存の商店街を生かしながら開発しようというものの。隣近所2〜3軒がまとまれば再開発に着手でき、小規模な建て替えを連鎖的に行うことで街を作り替えていく。さらに既存の建物との統一感を保つため独自のデザインコードを設けたり、商店街に足りない機能を補いながらテナントミックスを図るなど、様々な工夫と試行錯誤の積み重ねが斬新なプランを可能にしている。この新手法は、今や「丸亀町方式」として全国の疲弊する商店街から注目を集めている。

「丸亀町ってテナントはずいぶん変わりましたけど、じつは家主は昭和20年頃からほとんど変わっていないんですよ。かく言う熊さんも丸亀町で生まれ育った4代目再開発事業に携わる他のメンバーも多くが丸亀町育ちだ。

そんな彼らが育った昭和の丸亀町は、華やかな表通りを一步横丁に入れば、小さな旅館や銭湯、八百屋が並び、普段着で行き来するも一つの街の顔があった。「昔は店の人もみんな街に住んでいましたからね。そこには生活があり、井戸端会議があり、人のつながりが濃かった分、今より街がギスギスしてなかったと思うんですよ。」

ところが、バブルによる地価高騰で店主たちが街を出ざるを得なくなると、次第に近所のつながりが薄れ、店は孤立し、街から「ゆ

### 今、街に必要なもの

とり」が消えた。「今、この街に必要なものは何かと考えた時、それは僕らがかつて経験してきたことの中にあったんですよ。点」ではなく、面」で街をつくるということ。それは決して一人じゃ出来ない。その気づきを小規模連鎖というシステムが後押ししたんだと思います」と熊さんは分析する。

### 街の中心にどう「余白」をつくるか

「表通りだけじゃなくて、裏路地も整備するんですよ」と熊さんが見せてくれたのは式番街東棟の図面。「裏庭をつくる感覚ですね。路面には足に優しいレンガを使い、ベンチや緑も置いて。将来的には裏路地沿いにも小さなお店ができるといいな」。幅2m程の小さな路地だが、街中ではと出来るすきま空間を作りたいたと熊さんは語る。

さらに裏路地を通って式番街東棟に入ると、3階には新設の「アーカイブセンター」が入る。アーカイブセンターとは、商店街がイニシアティブをとって様々な人や情報をコーディネートし、商品開発や人材育成に取り組み活動拠点だ。例えば、地元デザイナーや若手アーティストの人材バンクをつくり、彼らの協力を求める事業者とのマッチングを図ったり、大学と連携した「商人塾」や各種セミナーなども予定している。加えて、参番街の「ファクトリーマーケット」では、ものづくりを取り組む職人たちのチャレンジショップを用意するなど、面白い物だけじゃない街との関わり方が、様々な形で提案されている。

消費する街から、生み出す街へ。街の本当の居心地の良さは、表通りを歩くだけではわからない。かつての横丁がそうだったように、そこに集う多種多様な人たちの日々の営みが立体的に交錯するところに、



その街ならではの空気感や懐の深さが生まれる。今回用意された様々な「余白」には、そうした新しい街への期待と可能性が込められているように感じた。

(小西智都子)

### ワインバー葡萄塾

「屋台感覚で気軽にグラスワインを楽しんでほしい」と、旧富士銀行跡で営業していた「葡萄塾」が東棟4Fにお引っ越しです。営業時間を延長し、昼はテラスで自然光を浴びながらお茶を飲んだり、夜は仕事帰りにふらっと一杯と、自分仕様で様々な使える、いわば街中の大人の社交場に。「人が集まれば何か生まれる。そういうオープンな空間にしたいですね」とオーナーの高橋さん。毎月恒例のフリーライブも続きます。



### ガラスのアーケード

A街区からC街区にかけて新たに取り付けられるアーケードにも注目です。高さは約20mと現在のほぼ2倍でおそらく日本初。屋根はドームと同じくガラス張り、自然光を取り入れた明るく開放的な空間を演出します。また今回は既存の商店街を生かした開発のため、柱の位置を動かさずに設計するのが至難の業だったとか。あるものを生かしながら最新技術で生まれ変わるアーケード、完成は来春予定です。





『ダ・ヴィンチ・コード』の香川版?!

## 『源内・コード』で丸亀町を探検

以前、Ankii1号の「さぬきの歴史を探る」というコーナーで、老番街の工事予定地から、江戸時代の井戸が発見されたという記事を紹介した。

この井戸は、高松城跡で見つかった井戸の中では最大規模で、江戸時代初期、生駒親正が高松城を築城した頃のものだと推定される。しかも井戸に使われていた石の一部には「○の中に十字」の刻印があり、江戸末期に書かれた「弘化年間高松城下絵図」には、井戸の場所に「血屋敷井戸趾」という記述が見つかった。これはもしかや隠れキリシタンと関係があるのでは?とミステリーハンターよろしく編集室内でも盛り上がったのだが、実際にはそれを決定づける証拠はなく、いずれにせよ貴重な遺跡なので井戸の復元を期待したいと記事を締めくくった。

で、ここからが本題。先日、

編集室にある小説の草案が届いた。「源内・コード」と名付けられたその物語では、前出の井戸の謎を題材に、モナ・リザの絵に隠された歴史の真実を暴く人気映画『ダ・ヴィンチ・コード』に負けない(?) 壮大な歴史ミステリーが、丸亀町を舞台に展開されていく。

早速、送り主の築港万次郎さんを訪ねると、「井戸は郷土の大切な歴史遺産。その復元を願って、この井戸が新しい観光スポットになるようなストーリーになればと挑戦しました」とのこと。たしかに丸亀町周辺には今も城下町の名残りがあちこちに見られ、それらを読み解いていけば、いつもとは違った街の姿が浮かび上がってくる。そこでAnkiiでは「源内・コード」の舞台を訪ねて、築港万次郎さんと一緒に丸亀町周辺を探検してみた。

### 「『源内・コード』のあらすじ」

ある日、高松市美術館のエントランスホールで、館長の変死体が見つかった。しかも、平賀源内の作品「お神酒天神」のように顔を血で染めて、「ナガレバチ」の台座にあぐらをかくという不自然な姿。死の直前に館長からメールをもらい、死体を発見したA男としおりは、とっさにこれが丸亀町で発見された血屋敷井戸趾の謎を解く暗号だと気づく。なぜなら、すでに井戸の発掘に関わった学芸員が2名、何者かに殺されていたからだ。

丸亀町商店街で店を営むA男は、高校時代の恩師の影響で昔から高松藩の歴史を調べていた。そして店でアルバイトをするバレイリーナとしおりと一緒に血屋敷井戸趾を調べているうちに、ある重大な事実を発見する。

1588年、豊臣秀吉の命を受けて讃岐にやってきた生駒親正は、この地に高松城を築き、城下町の鬼門を守る場所に井戸をつくった。親正は、豊臣家の財務を司る中老職で、戦よりも食料や軍資金の調達に才を発揮した人。秀吉の朝鮮出兵の際、かつて小豆島領主だった小西行長がひそかに金銀財宝を乗せた亀甲船三隻を奪いもどした時も、親正は豊臣の軍資金として船を隠し保管することを約束した。

時は流れて、讃岐のダ・ヴィンチ、平賀源内の頃。高松藩に仕えた源内は、ある時、井戸に隠された秘密を発見する。高松城を設計した黒田官兵衛は築城の名手にして、キリシタン大名としても知られた人。源内は、丸に十字の刻印や、井戸の不自然な形を眺めているうちに、これが井戸ではなく礼拝所として作られたものであり、地下都市への入口を示す手がかりだと知る。その謎をひそかに伝えるべく、源内は地図に書かれた井戸の場所にそと「血屋敷井戸趾」という謎の言葉を添えた。

核心をつかんだA男らは、ある夜、井戸を壊した者たちを葬ろうとする犯人一味に命を狙われ、屋島北嶺の洞窟へと逃げ延びる。洞窟の奥には昔から海底トンネルに通じる池があるという伝説があり、追いつめられたA男らは、とっさに池に逃げ込んだ。伝説どおり、海底トンネルをたどって高松城の天守閣の下までたどり着いた一行は、地下で源内が隠したエレキテルを発見する。それを作動させると壁が崩れて、巨大な岩窟ドームが現れた。そこには、親正が隠した亀甲船が大量の財宝や武器を満載して、いつでも出立できるように配置されていた。

## 商店街フォトガラー

「商店街フォトガラー」とは、地元フォトグラファーGABOMIが香川県高松市の「マチ」で撮影した写真作品群のこと。

日本一長いと言われる商店街とその周辺エリアを、地元では「マチ」と呼んでいます。そのマチを背景として一般モデルを撮影したり、マチのあらゆる部分を撮影中。マチには様々な人が集まるので、撮り方も被写体も場所も様々に。商店街フォトガラーを通じて、ナニカを感じたり発見してもらえれば…。そんな思いで今日もマチでパシャリ。作品はインターネットで公式サイトにて公開しています。また、商店街の街角にも展示する予定です。お楽しみに!

「商店街フォトガラー」公式サイト  
<http://www.art-oldnew.jp/project/gabomi/>

GABOMI【ガボミ】プロフィール  
 1978年高知県高知市生まれ、香川県高松市育ち。  
 自ら掲げた目標「残像写真」を求めて彷徨う日々を送るフリーフォトグラファー。

GABOMI×丸亀町  
 アートプロジェクト企画  
 第一弾!



編集・制作 ■ 「Anki」編集委員会

編集長 ■ 高尾 朔

アート・ディレクター ■ 仁田貴夫

エディター ■ 小西智都子

白井ひとみ

吉田紀久子

廣瀬将人

デザイナー ■ 木村由香

眞鍋亜希子

林田恭孝

村上 彩

フォトグラファー ■ 仁田貴夫(特集) 他

印刷 ■ 滝川印刷株式会社

発行 ■ 高松丸亀町まちづくり株式会社

〒760-0029

香川県高松市丸亀町13番地2

丸亀町ビル

問い合わせ先 ■ 高松丸亀町まちづくり株式会社内

tel.087-823-0001

fax.087-823-1433

ichibangai@marugamemachi.ne.jp

http://www.kame3.jp

◎次号は、  
リニューアルして  
お届けします。  
お楽しみに。

高松スタイル「Anki」へのご意見、ご感想や  
ご質問などをお寄せください。  
F A X 087-823-1433

©高松丸亀町まちづくり株式会社 2009  
本誌記事の無断転載を固く禁じます。

実際に探検してみました！



黒田官兵衛の「赤合子成兜」。ふた付きの漆椀である「合子」をかたどったとされる



### 二、ガラスドームの形は 黒田官兵衛の兜にあった？！

井戸趾から南に歩くと、丸亀町商店街の新しいシンボル、ガラスドームが見えてきた。円形の屋根からは自然光が差し込み、晴れた日は青天井が気持ちいい。ところが「このドームの形、じつは黒田官兵衛の兜そっくりなんです」と築港万次郎さんは三やり。資料を見ると確かによく似ている。でも、うどん鉢をひっくり返した様にも見えるしなあ。この意外な符合、あなたなら何に見える？



「血屋敷井戸趾」と記された弘化年間高松城下絵図(香川県立ミュージアム蔵)



石に刻まれた刻印と生駒家の家紋「波切車」



発掘時の井戸の様子

### 一、井戸趾にまつわる謎

発見された井戸趾は三越の北側にあり、現在は立ち入り禁止になっている。大きさは東西約3.8m、南北約5.9m、深さ約1.6m、井戸というより小型プールのようだ。石垣の刻印について、発掘調査を行った高松市教育委員会によると、左下の扇型は生駒家の家紋である「波切車」を、右上の○に十字は井戸を造った施工主を表すもので、十字架ではないとのこと。一方、古地図に記された「血屋敷井戸趾」は手がかりがなく、今なお書かれた理由は判明していない。



### 四、高松市美術館に潜む 謎のピラミッド？！

映画「ダウインコード」を観た人なら、「上下対のピラミッド」と言えばピンとくるかもしれない。ご本家ではルーブル美術館のガラスのピラミッドの下に「聖杯」マガタラのマリアの棺が眠っていることになっているが、なんと高松市美術館にも「対のピラミッド」があった！一つは美術館の入り口にある街灯。もう一つはそこからまっすぐ館内に入ると、ガラスの天井がちょうど逆三角形に見えるのだ。しかも、その真下には「源内コード」の最初に登場する「ナガラバチ」ということは、この下に「聖杯」が？



亀甲船/出典:フリー百科事典「ウィキペディア(Wikipedia)」

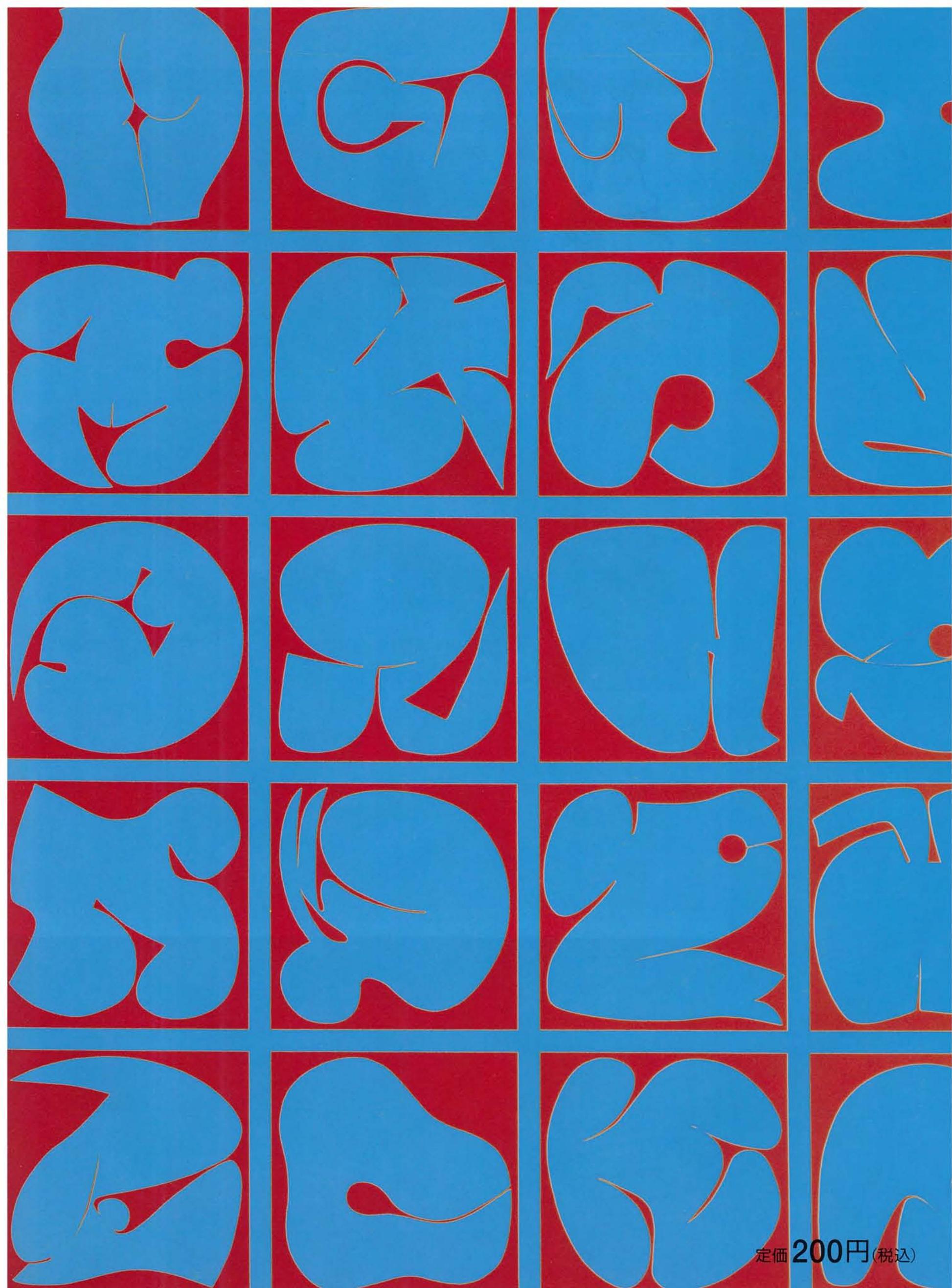


### 三、丹下健三の体育館は 亀甲船？

次に向かったのは「船形」の体育館として親しまれている香川県立体育館。築港万次郎さん曰く、これが亀甲船に似ているらしいのだ。「亀甲船」とは、豊臣秀吉の文禄・慶長の役で朝鮮が使用した軍艦のこと。現存する船体がないので正確な船の形は不明だが、亀に似ていたので亀甲船と呼ばれた。改めて県立体育館を見ると、平らな胴体といい、確かに4本の柱が亀の足に見えなくもないが、設計者の丹下健三が何を意図したのか、今となつては知る由もない。

まだまだ謎の多い「源内コード」。この続きは、ぜひ小説の完成に期待したい。(小西智都子)





定価 200円(税込)